関西大学『独逸文学』第 61 号 2017年 3 月

ハイネの大伯父ジーモン・ファン・ヘルデルン

今本　幸平

0．はじめに

ジーモン・ファン・ヘルデルン（Simon van Geldern, 1720-88）[1]のことを知ったのは、小岸昭氏の『マラーノの系譜』[2]を通してであった。彼はハインリヒ・ハイネ（Heinrich Heine, 1797-1856）の母方の大伯父である。ハイネの三大詩集の最後の一つである『ロマンツェーロ』（*Romanzero*, 1851）に収録されている『イェフダ・ベン・ハレヴィ』（*Jehuda ben Halevy*）について、ユダヤ人としてのハイネの自意識という観点から考察した拙論[3]を書くにあたり、詩の表題になっているイェフダ・ベン・サムエル・ハレヴィ（1075頃-1141）が、スペインに生まれたユダヤ人の詩人であり、作中では同じくスペイン出身のユダヤ系詩人であるガビーロールやイブン・エズラと並んで、三巨頭として称賛されていたことから、スペインとハイネには何か関係があるのかと思っていたところ、同書が見つかったのである。

小岸（1998）は、ハイネの母方のヘルデルン家の祖先がセファルディ

1　小岸（1998）［脚注２］ではvan Geldernは「ファン・ヘルデルン」と表記されている。ハイネは『メモワール』でde Geldernと表記しており、木庭（1992）［脚注34］の訳では「ド・ゲルデルン」と表記されている。Rosenthal（1978）［脚注６］は書名にはドイツ語のvonを用いているが、本文中ではオランダ語のvanが用いられている。また手紙の署名にはvonとvanの両方が見られる。本稿ではオランダ語の読み方に近い「ファン・ヘルデルン」と表記している。

2　小岸昭『マラーノの系譜』、みすず書房、1998年。

3　拙稿「『イェフダ・ベン・ハレヴィ』におけるダリウスの小箱―記憶のメディアとしての文学とハイネの自意識に関する小考」、『ハイネ逍遥』第９号、ハイネ逍遥の会、2016年、９-16ページ。

ムと呼ばれるイベリア半島系のユダヤ人だったと書かれた文献を発見したと述べ[4]、悲劇『アルマンゾル』の舞台が15世紀末のスペインに設定されていることを、祖先の故郷への回帰とみなしている[5]。レコンキスタが完了した1492年に、スペインではユダヤ人追放令が発令され、スペイン、ポルトガルのユダヤ人たちは国外へ退去するか、キリスト教への改宗を余儀なくされた。改宗してイベリア半島に留まったユダヤ人たちは新キリスト教徒（cristianos nuevos）と呼ばれ、またマラーノ（marranos「豚」の意）という蔑称でも呼ばれた。彼らの中には表向きはキリスト教徒となりながら、密かにユダヤ教の信仰を守り続けた人々も多く、そのようなマラーノの二重性を体現した人物の一人として、小岸氏はハイネの大伯父ジーモン・ファン・ヘルデルンを取り上げている。

もしハイネの母方の祖先がセファルディムだということが事実なら、ハイネがスペインのユダヤ人詩人たちに関心を持ったことにも納得がゆく。ハイネはジーモンに強い共感を抱いていており、前述の拙論では『イェフダ・ベン・ハレヴィ』の詩と大伯父ジーモンと詩人ハイネの出自という三点を関連づけて論じたいと考えたが、執筆当時は筆者の手元にある資料が乏しかったため、ジーモンに関しては言及しなかった。しかしハイネがジーモンに共感していたという事実は、ハイネの自意識を探るうえで、この人物が重要な鍵の一つを握る可能性を示しており、看過しがたい。そこで本稿では、拙論執筆後に入手した大伯父ジーモンに関する伝記的資料と、ハイネの回想録『メモワール』（*Memoiren*）の記述を取り上げてジーモンの人物像を描き出し、ユダヤ人としてのハイネの自意識という大きなテーマに近づく一歩としたい。

4　小岸　1998年、184ページ参照。ここで言及されているのは以下の資料で、書名と同名の展覧会の資料集である。Kruse, Sabine / Engelmann, Bernt（Hrsg.）: *"Mein Vater war portugiesischer Jude..."*, Göttingen; Steidl Verl., S. 156f.（出版年記載なし）なお、書名のmein（私の）とは、ハイネではなくヘンリエッテ・ヘルツのことである。

5　小岸　1998年、209ページ参照。

1．ジーモン・ファン・ヘルデルンの生涯[6]

ジーモン・ファン・ヘルデルンは、1720年11月12日にウィーンで生まれた。父親はラツァルス（Lazarus van Geldern）、母親はザーラ・レア・プレスブルクで、彼女の父ジーモン・ミヒャエル・プレスブルクは、ウィーンで貨幣鋳造役（Münzfaktor）として宮廷に仕えていた。ラツァルスは1716年にザーラ・レアと結婚し、ウィーンで義父の仕事を手伝っていたが、1721年に父親に呼び戻されて、妻と生まれて間もないジーモンを連れてデュッセルドルフへ戻った。

ラツァルスの父ヨーゼフ・ヤーコプ（通称ユスパ Juspa）は、プファルツ選帝侯の宮廷ユダヤ人として貴族を相手に金融や貿易の仕事をしていた。ユスパはユダヤ人共同体の中心人物で経済的にかなり余裕があり、また当時の選帝侯ヨハン・ヴィルヘルムがユダヤ人に対して寛容だったこともあって、1712年にデュッセルドルフで初めてのシナゴーグつきの邸宅を建てる許可も得た。このようにユスパの代のヘルデルン家はユダヤ人社会の名家であったが、ヨハン・ヴィルヘルムが1716年に死去すると、後継のカール三世フィリップは1718年に居城をデュッセルドルフからハイデルベルクに、さらに1720年にはマンハイムに移した。そのためデュッセルドルフの町の人口は減少し、ユスパらデュッセルドルフの宮廷ユダヤ人たちの商売も下降気味になる。ユスパが建てた邸宅も、ハイネが子供の頃にはすでに救貧院（Hospital）になっていた[7]。それでも1718年にはまだヘルデルン家はデュッセルドルフのユダヤ人税の10パー

6　ジーモン・ファン・ヘルデルンの生涯については主に以下の資料を参照した。
Rosenthal, Ludwig: *Heinrich Heines Großoheim Simon von Geldern, Ein historischer Bericht mit dem bisher meist unveröffentlichten Quellenmaterial*. Kastellaun: Aloys Henn Verl., 1978.
Heymann, Fritz: *Der Chevalier von Geldern, Geschichten jüdischer Abenteurer*. Königstein/Ts: Athenäum Verl., 1985.

7　1809年の地図ではシナゴーグがあった場所にはHospitalと記されている。https://commons.wikimedia.org/wiki/File%3ADüsseldorf_und_seine_Umgebungen_1809.jpg（2017年２月５日アクセス）

セントを負担するほどの資産があったが[8]、1727年に父ユスパが死去した後、ラツァルスが後継者として宮廷ユダヤ人に任命されたときには、ヘルデルン家の収入はかなり少なくなっていた。しかしラツァルスは、当時6歳だったジーモンを含めて子供たち全員にかなり高度な教育を受けさせた。ジーモンはトーラーやタルムードなどユダヤ教の宗教教育をはじめ、外国語や数学などの学問の他、乗馬やフェンシングの訓練も受けていた。しかしジーモンが成長するにつれて、父の仕事に関心を示さないことが原因で親子関係は悪化し、1747年にはついに決裂してジーモンは家を出てしまった。その後の約30年間は、数回短期間の滞在を除いてデュッセルドルフには戻らず、ウィーン、ロンドン、アムステルダム、パリなど、ヨーロッパ各地にいた親族と、そのつてを頼りにヨーロッパ中を渡り歩き、北アフリカや中東パレスチナにまで足を延ばした放浪の生活を送ることになる。

ロンドンやウィーンの親族からは定住して堅実に生きるよう勧められ、ロンドンでは家庭教師の職を斡旋されたり、ウィーンでは起業のための資金提供の申し出もあった。しかしジーモンは彼らの勧めには耳を貸さず、ロンドンの宮廷ユダヤ人だった遠い親類のヴォルフ・ベルリンから十分な路銀を得て1749年2月にロンドンを発ち、ウィーン、シュタイアーマルク地方、イタリアのトリエステとヴェネツィアを経て、リヴォルノから船でアレクサンドリアへ向かう。そして1751年5月19日にパレスチナの都市アッコにたどり着き、そこからすぐにツファットへ向かった。ツファットはユダヤ教の神秘思想カバラーの聖地で、ジーモンはそこで約半年間過ごした後、この地の裁判所から、同信者たちが施しを与えるに値する博識な人物として推薦する証書を得た[9]。彼はこのような推薦書を1753年9月にも手に入れ、自身がカバラーの知識を身につけた聖地巡礼者であることを示すのにそれらを利用した。そのおかげで彼はヨーロッパへ戻ってからも聖地から来た敬虔な巡礼者として各地で厚遇され、

8　Vgl. Fleermann, Bastian: *Marginalisierung und Emanzipation. Jüdische Alltagskultur im Herzogtum Berg 1779–1847*. Neustadt an der Aisch: Verlagsdruckerei Schmidt, 2007, S. 197.

9　Vgl. Rosenthal (1978), S. 97.

再び聖地へ赴くための寄付を集めることができたのである。実際ジーモンは再び聖地を目指して1756年８月25日にリヴォルノから船に乗ると９月26日にアッコに着いた。ジーモンはここを拠点にハイファやツファットで預言者の墓を巡ったと記録している[10]。

1756年12月３日にヨーロッパへの帰国の途につき、翌年１月14日にリヴォルノに着いたあとは、フィレンツェ、ボローニャ、シエナ、ローマ、ナポリなど、主にイタリア中南部の諸都市のユダヤ人共同体をめぐりながら、資金援助と他の共同体にそれを促す推薦書を集めた。その後の旅路はフランス南部のニース、ボルドーを通って10月末にパリへ至る。パリでの滞在期間は翌1758年２月までと、1758年８月から９月の二度に分かれている。この時にジーモンはパリでの人脈を広げた。イタリアで知り合ったフランスの駐パルマ大使ロシェショワール侯爵（Marquis de Rochechouard）という人物がジーモンのことを気に入り、パリの名士たちへの紹介状を書いたのである。

次いでジーモンはドイツのザールルイ、マンハイム、ボン、ケルンなどの町を経由して、1759年８月にアムステルダムに着いた。オランダにはドイツおよび東欧系ユダヤ人（アシュケナジム）と、1492年のレコンキスタ完了以降、スペイン、ポルトガルを追われてオランダに定住していたイベリア半島系ユダヤ人（セファルディム）がそれぞれに共同体を形成していた。1759年９月３日、アシュケナジム系共同体は、ジーモンがツファットでトーラーの研究を行い、定期的に報告を送ることを条件に、10年間に渡って彼に年間50グルデンの補助金を支給することを決めた。ジーモンはセファルディム系の共同体にも援助を求めていたが、そちらの希望はかなわなかった。その理由は明らかではない。オランダのセファルディムたちは、アシュケナジムたちよりも教養や社会的地位があるという自負を持つ気位の高い人々だったと言われており[11]、あてもなく放浪を続ける彼の姿に好感を持たなかったのかもしれない。

10　Vgl. Rosenthal（1978）, S. 37.

11　Vgl.Veit, Philip F.:"Heine: The Marrano Pose". In:*Monatshefte für deutschen Unterricht, deutsche Sprache und Literatur,* Univ. of Wisconsin, Vol. 66, No. 2, 1974. S. 146.

補助金は前払いで与えられたが、1760年の春にジーモンが向かったのはロンドンだった。そこでジーモンは「ロンドンのバール・シェム」（Baal Schem von London）ことハイム・ザムエル・ヤーコプ・ファルク（Hayym Samuel Jacob Falk, 通称ファルク博士）という著名なカバラー主義者に会うつもりだった。12年前に初めてロンドンへ来た時とは違い、ツファットでカバラーを学んだ証明書を持ち、自ら「ベトゥリアのヘルデルン博士」と名乗ったジーモンは、ファルク博士に自分のことを知ってもらおうとしたが、二人の「博士」は折り合いが悪く、またオランダでのように裕福なユダヤ人たちから補助金を得ることもできずに、ロンドンの旅は不成功に終わり、ジーモンはドイツへ戻った。

1760年８月27日にミュンヘンからスイスへ向けて出発し、きっかけは明らかではないがジュネーヴではヴォルテールと知り合って、10月末から11月始めの数日間を彼の屋敷で過ごした。フリッツ・ハイマンによると、ジーモンはヴォルテールにラディーノ語（スペイン系ユダヤ人の言語）に翻訳された「ゾーハル」（モーセ五書の注釈書でカバラーの主要文献）を贈ったという[12]。ヴォルテールはこの風変わりな客を興味深く思っていたようで、リヨンにいる友人への手紙で、ジーモンがジュネーブからリヨンとマルセイユへ行くと言っているので、良ければあなたのところへ行かせると書いている。

ヴォルテールに言った通り、ジーモンはリヨンを経由してマルセイユへ向かった。そこから再びツファットへ向かう計画だったが、ツファットは1759年の地震で破壊されていたため計画を断念して、トゥールーズ、ボルドーを経て再びパリへ向かい、1761年２月11日に到着した。

ジーモンは旅の資金を得るために度々寄付金を集めたが、それだけでは十分ではなく、希少な本を主に聖職者に売ったり、賭け事を主な収入源にしていたこともあったようだ。しかし賭け事に負けて負債が重なり、1761年末にはパリから夜逃げ同然に離れなくてはならなかった。旅を始めようとした時に親類から定職に就くよう勧められても聞く耳を持たなかったジーモンも、金銭的な不安に直面すると、より確実な収入を得られるように、外国語に堪能であることを生かして王立図書館の司書か翻

12　Vgl. Heymann（1985）, S. 309.

訳家として職を得られるようルイ十五世に直接手紙を書いている[13]。

前述の通りジーモンはパリに1757年10月から1758年９月までに二度に分けて滞在した際に、パリの名士たちとの人脈を作り上げていた。そして1761年の三度目の滞在時には、ヴェルサイユの宮廷へ紹介される栄誉を得て、宮廷に仕える職の提供も受けた。しかし彼は三度目の聖地への旅を計画していたためにそれを受けず、パリを離れて1762年にオランダで旅券を手に入れた。しかし３月21日に叔父ザムエル・ジーモン・プレスブルクが死去したことから、遺産相続の問題を片づけるためにいったんウィーンへ向かった。オランダからウィーンへ向かう間に立ち寄ったドイツの諸都市では、またしても敬虔な聖地巡礼者として寄付金を集める一方で、ブラウンシュヴァイクでは、ヴォルフェンビュッテルにあるアウグスト公爵の図書館で司書および翻訳家として職を得ようとしたが、試みは成功しなかった。申請書によれば、もしこの求職がうまく行けば、聖地への旅はやめるつもりだったようである[14]。彼は1769年11月にも再び同様の申請を行ったが不採用となり、この時図書館員として採用されたのがレッシングだった。広い世界を求めて若いころから放浪生活を続けてきたジーモンも、40代になって安定志向へと心境に変化が出てきていたのかもしれない。

ジーモンはウィーンで遺産相続をした後、エルサレムに向かおうとしたが、1764年１月12日から24日まで、彼は心当たりがないままに逮捕、拘留された。「マウス事件」と呼ばれる事の経緯は以下のようである。

1763年の秋にウィーンに着き、母方の親類がいたプレスブルク（ブラチスラヴァ）との間を行き来していたジーモンは、ウィーンでマウスという名の隠居した近衛兵の住居に間借りした。家主のマウス氏は病身で、ジーモンの世話は妻と娘がしていた。ジーモンはこの部屋が気に入らず、11月20日から12月７日まで滞在しただけだったが、マウス氏の妻と娘が、ジーモンが滞在中にその娘と、彼が住んでいた部屋の一階にあった酒屋の少女を凌辱したと訴えたのである。ジーモンはそれが根も葉もないでっち上げであるとして応訴し、取り調べの結果ジーモンの主張は認めら

13　Vgl. Rosenthal（1978）, S. 51, 120.

14　Vgl. Rosenthal（1978）, S. 53.

れて釈放された。しかしながら、反ユダヤ的な駐留部隊指揮官のシュラッテンバッハ伯爵によって、生まれ故郷であるウィーンからの退去を命じられ、戻れば再び逮捕すると通告された。ジーモンは弁護士に依頼して自身の名誉回復を求めたが、退去命令が撤回されたかどうかは明らかになっていない。

釈放後にジーモンは改めて三度目のパレスチナへの旅に出た。今回は陸路をとってヘルマンシュタット（現ルーマニアのシビウ）を経由してイスタンブールへ向かったが、ペストが蔓延していたため引き返し、トリエステを経由してヴェネツィアから船でアレクサンドリアへ向かい、そこからダマスカス、ヤッファを経てエルサレムに向かった。この時の旅では、エルサレムからヘブロンへ向かう途中でジーモンはアラビア人の盗賊たちに襲撃されて何とか逃げ延びるという経験をした。

マウス事件からおよそ４年後の1768年６月に、アイゼンシュタットにいる親類のところへたどり着いた。いつまでそこに滞在していたのかを示す史料は残っていないが、その後は北へ向かった。1769年11月24日に父ラツァルスが死去するが、それより前にはジーモンはデュッセルドルフに到着しており、父親からユダヤ教関連の貴重な書籍を譲り受けている。その中には現在「ダルムシュタット・ハガダー」（Darmstädter Haggadah）[15]と呼ばれる15世紀ごろの写本や、ラツァルスが1723年に作らせ、後にハイネが「我が家の聖書」（unsere Hausbibel）と呼んだ高価な挿絵入りのハガダーも含まれていた[16]。その後1769年９月から約２か月間ヒルデスハイムに滞在し、ブラウンシュヴァイクで前述した二度目の求職活動を行った。11月18日にハレへ向けて荷物だけ先に発送した記録が残っているが、ジーモンのハレ到着が12月16日であることから、父

15　ハガダーは日本語で「過越祭の式次第」とも呼ばれ、祭りの日の晩餐で読まれる。このハガダーはジーモンが死去した後、兄弟のミヒャエルによってケルンの収集家であるヒュプシュ男爵（Baron von Hüpsch）に譲られ、1805年に男爵が死去した後にダルムシュタットの図書館に所蔵された。Vgl. Rosenthal（1978）, S. 66.

16　Vgl. Fleermann（2007）, S. 198. 当該箇所は『フランスの状態』の第４記事。Heine, Heinrich: *Historisch-kritische Gesamtausgabe der Werke*, hrsg. v. Manfred Windfuhr（Düsseldorfer Ausgabe）, Hamburg: Hoffmann und Campe, Bd. 12, 1980, S.248. 以下Heine, Heinrich（DHA）と表記する。

親死去の知らせを受けて一度デュッセルドルフへ戻ったのではないかと推測されている。ハレからデッサウ、ライプツィヒを経て1770年１月にはドレスデンで寄付金を集めた。その後南下してアウクスブルク、ミュンヘンへ至る。

ミュンヘンでは金策に走るも上手くゆかず、1771年にジーモンはロンドンへ向かう。この頃の彼の経済状況はあまり芳しくなかったようである。ロンドンでは旅行記を出版しようとしたが実現せず、中東から持ち帰った貴重な古書を有料で展示したり、売却したりしながら生活していた。また短期間ではあるが、ケンジントン地区にある学校で教師として仕事をしたこともあった。ロンドンには1774年の秋まで滞在したが、その後ドイツへ戻ってからしばらくのことは詳しい史料がない。恐らくデュッセルドルフ周辺の親類のところを拠点に小旅行をしながら、蔵書を売って生活していただろうとローゼンタールは推測している[17]。

1778年から1788年に死去するまでの10年間は、アルザスの町ブクスヴァイラー（ブクスヴィレール）がジーモンの拠点となった。ここに移り住むことになったのは、彼が学んだカバラーが関係している。一連の出来事を理解するには18世紀のメンタリティー、つまり神秘思想や魔術に傾倒しがちだった風潮を踏まえる必要があるとローゼンタールが述べているように[18]、今日の我々には荒唐無稽にも思える出来事がきっかけだった。

1776年11月に、フリーメーソンの会員だったゴットリープ・フォン・グゴモス男爵が、出席するはずだったフランクフルトでの会合に現れず、急遽キプロスへ行くことになったという手紙だけを残して行方が分からなくなった。足取りを探るうち、彼は悪魔によって「炎の塔」にさらわれて拷問を受けている、といううわさが立ち、ロッジから20名の救出委員会が結成される。その中にヘッセン・ダルムシュタット侯爵家の世子ルートヴィヒがいた。彼はグゴモス男爵が姿を消す直前に、偶然ジーモンから求職の請願書を受け取っていた。ジーモンはこのころ一時的にフランクフルトの見本市で書籍の販売に携わっていた。ルートヴィヒは、

17　Vgl. Rosenthal（1978）, S. 60

18　Vgl. Rosenthal（1978）, S. 60.

ジーモンの履歴を見て、偉大なカバラー主義者ならば炎の塔への道を知っているだけではなく、男爵を悪魔の拷問者の手から救い出す魔力も持っているに違いないと考え、男爵を探させることにしたのである。

ジーモンの捜索・救出旅行には、グゴモス男爵の友人で侯爵家の秘書でもあったヤーコプ・ロスと、メクレンブルク・シュトレーリッツ家の王子ゲオルクが同行することになり、三人は特命大使として外交官の旅券を与えられ、オランダ経由でロンドンを目指した。うわさでは炎の塔はスコットランド北部にあるとされていたからである。ロスとゲオルクは、ジーモンと彼の魔術の能力に対して信頼と懐疑が相半ばする心境だったようで、ジーモンとゲオルクの間では時折いさかいが起きることもあった。ロンドンに着いてからもゲオルクはジーモンに疑念を抱き、ロンドンの著名なカバラー主義者ファルク博士に助言を求めるなど足並みは揃わなかった。一方ジーモンはオリエント風の衣装を着込み、王宮で英国王夫妻とトランプ遊びに興じてゲオルクを驚かせた。

結局この旅は、ゲオルクの兄弟からの知らせによって意外な結末を迎える。グゴモス男爵は多額の負債を抱えており、債権者から逃れるために、トイトブルクの森にある知人の家に身を潜めていたことが分かったのである。ジーモンたちはロンドンから帰途につき、ロッテルダムに到着すると、ロスはジーモンから特命大使としての証書を取り上げ、ダルムシュタットの宮廷へ宛てた手紙でジーモンが詐欺師だったと訴えた。ゲオルクは面倒ごとに巻き込まれるのを嫌って、ダルムシュタットへは立ち寄らずにウィーンへ向かった。ダルムシュタットでロスは不興をかったが、ジーモンは何とか批判をかわすことに成功した。1777年の末にルートヴィヒに世継ぎが誕生し、ルートヴィヒはそれを偉大なカバラー主義者による世を超越した力によるものと考えた。それでヘッセン・ダルムシュタット方伯の恩寵により、ジーモンに隠棲の地としてブクスヴァイラーの城の一部である小さな東屋が与えられたのであった。

ブクスヴァイラーに移り住んだことは、晩年のジーモンに重要人物との出会いをもたらした。それはアルザス地方のアンベルメニル（Emberménil）の神父アンリ・グレゴワールである。自由主義的な考えを持っていたグレゴワール神父は、フランスのユダヤ人解放に関心を持っていて、その方法を考えていた。彼は近郊のブクスヴァイラーにいたジーモ

ンのことを聞きつけ、彼をアンベルメニルの自宅へ招いて意見交換を行った。1785年にメッス（Metz）の王立学術芸術協会から懸賞論文のテーマが発表されると、その頻度はさらに増した。そのテーマは「フランスのユダヤ人を役立て、幸福にする手段はあるか」であった。グレゴワール神父は懸賞論文の執筆にあたり、ユダヤ人の宗教的、社会的問題についてジーモンの助言をあおぎ、必要な知識を補ったのである。こうして書かれた論文「ユダヤ人の身体的、倫理的、政治的再生に関する試論」（*Essai sur la régénération physique, morale et politique des Juifs*）は入賞を果たし、1789年に出版された。グレゴワール神父はこの論文の中で協力者であるジーモンに対する謝辞を述べている。

この論文はフランスでユダヤ人問題の議論が活発化する契機となった。グレゴワール神父自身もフランスの議会である三部会において奴隷制度の廃止や普通選挙の導入などと並んでユダヤ人解放政策にも取り組んだ。ジーモンは論文が出版される前年の1788年にすでに死去しており、死因も墓の場所も不明のままである。しかし彼が間接的に貢献したグレゴワール神父のユダヤ人解放運動は、後のナポレオン政権下で、ハイネが青年時代を過ごしたドイツのユダヤ人政策にも影響を与えたのである。

2．『メモワール』におけるジーモン・ファン・ヘルデルン

ハイネの死から28年たった1884年に出版された未完の回想録『メモワール』には、少年時代の思い出として大伯父ジーモンに関する言及がある。ハイネの故郷デュッセルドルフのメルテンスガッセ１番地に、「ノアの箱舟」と呼ばれる小さな家があった。ボルカー通りのハイネ家のすぐ近くにあったこの家の扉の上には、鮮やかに彩色されたノアの箱舟の絵が彫られていた。そこにはハイネの母ベティの弟ジーモン・ファン・ヘルデルンが住んでいた。小柄で厳めしい顔つきをしており、古風な衣装を身にまとって長い辮髪を結い、定職につかずに学問や文筆活動、書籍収集にふけったこの風変わりな叔父のもとへ、少年時代のハイネは足繁く通い、その家の屋根裏部屋で、祖父の蔵書や母の思い出の品とともに、叔父と同名の大伯父ジーモンが残した手帳を発見した。

しかしほこりをかぶった箱から見つけた最良で最も価値のあるものは、祖父の兄弟の手による手帳だった。この人は騎士とか東洋の人と呼ばれていて、私の老いた［大］叔母たち（Muhmen）はいつもこの人のことを歌ったり話したりしてくれた。
この大伯父は叔父と同様にジーモン・ド・ヘルデルン（Simon de Geldern）[19]という名だったのだが、変わった聖人だったに違いない。「東洋の人」（Morgenländer）というあだ名をもらったのは、彼がオリエントで大旅行をして、帰国した時はいつもオリエント風の衣装を着ていたからであった[20]。

ハイネに大伯父のことを話して聞かせた大叔母たちというのは大伯父ジーモンの二人の妹ブルネラ（Brunella van Geldern, 1739–1814）とヴェロニカ（Veronica van Geldern, 1730–ca.1830）であった[21]。ハイネの『メモワール』におけるジーモンに関する記述の主な情報源は、ジーモンの手帳と彼女たちであるが、手帳は「ほとんどがアラビア語、シリア語、コプト語の文字で書かれて」[22]いて、恐らく全て解読するのは困難だったことから、大叔母たちからの話の方が割合が大きかったのではないかと考えられる。しかし彼女らの話には出所が不明な「伝説的」なエピソードがいくつか見られる。

最も長く留まっていたのは北アフリカ沿岸の諸都市、特にモロッコだったようだ。そこで彼はあるポルトガル人から武具鍛冶の手仕事を身につけて、それを幸運に恵まれて営んだ。
彼はエルサレムへ巡礼し、モリア山の上で祈りに恍惚となって幻影を見た。何を見たのか？　彼はそれを決して明かさなかった。

19　手紙にこのような署名が見られる。Vgl. Rosenthal（1978）, S. 117. フランス語で書かれた手紙にはSimon de Gueldreという署名もある。Ebd., S. 137.

20　Heine, Heinrich: *Sämtliche Schriften in 12 Bänden*, hrsg. v. Klaus Briegleb, München: Hanser, 1976, Bd. 11, S. 571. 以下Heine, Heinrich（B）と表記する。

21　Vgl. Heine, Heinrich（DHA）, Bd. 15, S. 1214.

22　Heine, Heinrich（B）, Bd. 11, 572. 実際は大半がヘブライ語の斜字体。Vgl. Heine, Heinrich（DHA）, Bd. 15, S. 1216.

独立心のあるベドウィンのある部族は、イスラムにもユダヤ（Mosaismus）にも肩入れせず、北アフリカの砂漠の無名のオアシスに陣営を張っていたが、彼を自分たちの首領に選んだ。この好戦的な民族は、あらゆる近隣部族と争って暮らしており、キャラバン隊の脅威であった。ヨーロッパ風に言えば、今は亡き私の大伯父、聖なる山モリヤの敬虔なる幻視者は、盗賊団の長になったのだ[23]。

ジーモンの手帳や手紙などの史料から伝記を再構成したローゼンタールの研究では、ジーモンがモロッコに滞在したり、盗賊団の仲間になったという記述は見られない。したがってそれらは大叔母たちから聞いた話であろう。デュッセルドルフ版ハイネ全集（DHA）の注釈でも、ジーモンが時々武器鍛冶のような仕事をした可能性はあるが、盗賊の長にはならなかっただろうと推測している。というのは彼がユダヤ教の律法に抵触しないように気をつけていたからだという[24]。

ジーモンは聖地ツファットでカバラーを学び、カバラー主義者の証明書を手に入れたものの、関心は持っていなかったとハイマンは述べている[25]。確かに聖地から来た巡礼者という肩書は、ヨーロッパのユダヤ人共同体や上流社会で自身に箔をつけるには都合が良く、信用を得るためにそれを利用していた面もあったのかもしれない。しかし、生涯に三度もパレスチナを訪れたジーモンは、ユダヤの教えを常に尊重しており[26]、単なる世渡りのためとして割り切っていたわけではないと考えられる。

大叔母たちが語った「伝説」がハイネに大伯父への関心を起こさせた

23　Heine, Heinrich（B）, Bd. 11, S. 571.

24　Vgl. Heine, Heinrich（DHA）, Bd. 15, S. 1215.

25　Vgl. Heymann（1985）, S.272.

26　旅をしながらも祝祭日は厳格に守っていた。例えば1757年９月には、ユダヤ教で最も重要な祭日の一つヨム・キプル（贖罪の日）のためにボルドーに留まった。また行方不明のグゴモス男爵を探す旅の最中も、サバト（安息日）に移動しようとしなかったので、同行者たちはジーモンを置き去りにしなければならないところだったという。

Vgl. Rosenthal（1978）, S. 41, 62.

のだとしても、前節で見たように、ジーモンの生涯が波乱に富んでいたことは事実である。彼は中東のユダヤ教の聖地と、俗世間であるヨーロッパの上流社会の間を往復しながら、聖俗両方の有力者たちの懐に入り込み、着実に人脈を作り上げていった。経済的に困窮した局面もあったものの、彼の周囲には多くの協力者がいた。ジーモンには男女を問わず、人を引き付ける力があったのだろう。ハイネは大叔母たちから聞いた伝説的エピソードも踏まえて、ジーモンを山師（Charlatan）[27]と呼び、18世紀にのみ可能だった生き方をした人間だったとみなしている。

> 理解しがたい謎めいた現象がこの大伯父だった。彼は18世紀の始めと半ばにしかできない風変わりな人生を送った。彼は半分はコスモポリタン的、世界享楽的ユートピアを宣言する熱狂者であり、半分は自分の個人としての力を予感して、朽ちた社会の朽ちた垣根を壊すか飛び越えるかした冒険家だった。いずれにせよ、彼は全くもって人間だった。［中略］
> 彼の山師的な性格を、私たちは否定しないが、それは卑しい種類のものではなかった。彼は市場にいる農夫の歯を抜くような普通の山師ではなかった。彼は勇敢に偉い人の宮殿へ押しかけて、かつてボルドーの騎士ヒュオン（Hüon）がバビロンのスルタンにしたように、彼らの最も丈夫な臼歯を抜いた。宣伝も商売のうちという格言があるが、生きることは商売なのだ。他の商売と同じように。
> それにしても、重要人物で少しでも山師でない人がいるだろうか。控えめな山師というのは謙遜しながら高慢に振る舞う最低の山師だ！
> 　大勢の人に影響を与えようとする者は山師的な添加物が必要なのだ[28]。

少年時代のハイネは、そのような大伯父と自分自身を一体化させるほど、自由奔放に生きたジーモンに対して強い共感を抱いた。

27　Heine, Heinrich（B）, Bd. 11, S. 573.
28　Heine, Heinrich（B）, Bd. 11, S. 572f.

> それはそうとこの大伯父は、子供の空想力を大いに働かせた。彼に関する話は私の若い心情に消し難い印象を与えた。そして私は彼の放浪の旅と運命に深く沈潜したので、時々明るい昼日中に、不気味な感情にとらわれ、まるで自分がとっくに死んだあの人の人生の残りを生きているだけのように感じたのだった！
> 夜には同じことが回顧的に夢の中に映し出された。私の人生は当時大きな新聞に似ていた。上の欄には日々のニュースと論説を含めた昼間が書いてあり、下の欄には詩的な過去が文芸欄の連載のように、夜ごと夢の中で幻想的に表れてきた。
> この夢の中で私は完全に大伯父と自分を同一化していた。そして夜明けとともに、自分は［大伯父とは］別人で別の時代に属していると感じた。夢の中には私が今まで見たことがなかった場所があり、以前は予想もしなかった境遇があった。しかし私はそこでしっかりとした足取りで、しっかりとした態度で歩んでいた[29]。

ハイネが大伯父と同化していた少年時代の自分のことを新聞に例えていることについて、小岸（1998）は次のように述べている。

> 大伯父と一体化することによって、時事論議の現在と詩的な過去から成る「新聞」という表現世界へと、すでに予感的に立ち向かっていたのである。それはもちろん、ハイネの自我が彼を取り巻く社会から種々の圧迫を受けて、崩壊の危機に繰り返し陥ることを意味していた[30]。

これは少年時代のハイネが大伯父ジーモンの生き方を知ったことによって、後に作家、ジャーナリストとして新聞というメディアで自身を表現し、またユダヤという出自のために挫折を味わい、誹謗中傷に晒されるという自身の人生に「予感的に」気づいていたことの表れという解釈

29　Heine, Heinrich (B), Bd. 11, S. 573f.
30　小岸　1998年、199ページ。

であろう。ローゼンタールもこの個所を「天才の予見能力」[31]という言葉で同様に解釈している。しかし、「詩的な過去が文芸欄の連載のように夜ごと夢の中で幻想的に表れてきた」という文に注目すると、この個所は過去へのまなざしと見ることもできる。自分という存在は現在を生きると同時に、過去から続く物語の連載の一部であり、自分の背後には過去へと遡る長い道が続いている。つまりハイネがジーモンの生き方を知ることで、彼に対する共感と同時に、自身が担うユダヤの系譜への意識や関心が生まれた、あるいはより強まったと考えることもできるのではないだろうか。このような系譜への意識は、上記の引用の後に旧約聖書に現れることわざを引用した個所からも見出すことができる。

> この奇妙な状況はほぼ一年続いた。私はまた自意識をすっかり統一させたけれど、心の中には痕跡が潜んでいた。いくつもの特異体質、つまり自分の気質に全く合わないやっかいな共感と反感、そう、自分の考え方とは矛盾しているいくつもの行動さえ、私は自分が大伯父になっていたあの夢想時代の影響だと解釈している。
> 自分が間違ったことをして、それが自分でもなぜ起きたか理解できないように思える時、私はそれを、自分の東洋の分身のせいにしがちである。かつて父に、ちょっとした過失を言いつくろおうとしてこんな仮説を話すと、父はおどけてこう言った。「君の大伯父さんがいつか君に支払いを迫るような手形にサインしていなければ良いが」と。
> そんな東洋の手形は見せられていない。しかし私は自分自身の西洋の手形に十分手を焼いていたのだった。
> しかし、確かに金銭の負債よりもずっと悪い負債はある。それは先祖たちが私たちに返済するよう残したものだ。どの世代も別の世代の続きであり、彼らの行いに対する責任がある。聖書にはこうある。父祖たちが熟れていない［酸っぱい］ブドウを食べると、子孫たちの歯が浮いて痛むと。
> 次々に連続する世代の連帯が主調を占めている。そう、後から後か

31　Rosenthal（1978），S. 12.

ら舞台へ登場する人たちは、そのような連帯を引き継ぐ。そして全人類は最後に過去の大きな遺産を清算するのだ。ヨザファトの谷で大きな債務表が処分される。あるいはもっと前に、全世界の破産によって[32]。

下線部は、先祖の罪が子孫の代にまで及ぶという意味のイスラエルのことわざだが、「エレミヤ書」31章ではそのことわざは否定され、「人は自分の罪ゆえに死ぬ。だれでも酸いぶどうを食べれば自分の歯が浮く」[33]と書かれている。ハイネは預言者の記述ではなく、流布されていることわざをそのまま用いることによって、自身がユダヤの系譜の中にあることを明確に示そうとしているのではないだろうか。そしてそれには大伯父の存在が影響を与えていると考えられる。

3．おわりに

ハイネが20代の頃に書かれた少年時代の回想録『イデーエン　ル・グランの書』（*Ideen. Das Buch Le Grand*, 1827）には、大伯父ジーモンの事は出てこないのに対して、『メモワール』ではユダヤ教の聖地を旅行し、ヨーロッパの有力者たちの中ではったりを効かせた山師として生きたジーモンに対する共感が記されており、またユダヤ人としての自身の系譜をハイネが意識したであろうことも読み取れる。ハイネがそのような意識を持つのはいつ頃からなのか、というのが大きな問題点である。前述の通り『メモワール』はハイネの死後に出版された作品で、草稿が書き始められたのは1850年代とされている。しかしその成立事情はかなり複雑で、全てが晩年に書かれたとは言い切れない[34]。またユダヤをテーマとしたハイネの作品は悲劇『アルマンゾル』のような初期に書かれたも

32　Heine, Heinrich（B）, Bd. 11, S. 574f.（下線は筆者による）

33　「エレミヤ書」31章30節。同じことわざに基づく類似した記述が「エゼキエル書」18章２－４節にも見られる。訳は『聖書』新共同訳、日本聖書協会、1988年による。

34　『メモワール』の成立については木庭宏編『ハイネ散文作品集』第３巻、松籟社、1992年、279ページ以降（作品解題）を参照。

のもあるため、ハイネとユダヤの関係というテーマに取り組むには、ある程度時代を区切って、変遷を追う必要があるだろう。他の作品も視野に入れ、このテーマについてより詳細に検討してゆくことを今後の課題としたい。